「出題の意図」

選抜区分	２０２４年度　（選抜区分：一般選抜前期日程） 法学部　法律学科及び政策科学科　（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	１　課題文選択の背景 出典は、小坂井敏晶『格差という虚構（ちくま新書 1612)』(筑摩書房、2021 年 11 月）である。本書は、フランスで大学教員をしている筆者が、近時、格差を告発する書が多く出されていることに留意して、我々は何を求めているのか、格差のない理想社会とは何を意味するのかといった点について、「格差は絶対になくならないだけでなく、減れば減るほど人間を苦しめる」という視点から、格差問題について論じた書である。本問では、学校制度について論じた第１章から出題した。 課題文で筆者は、学校の目的は何かという問いかけを発端に、先進諸国の例を挙げながら次のように議論を展開する。勉学の機会が均等であっても家庭環境の違いにより学力の差が現れる。実際、難関大学には上層の子が集まっている。進学資金だけが問題なのではなく、家庭事情により言語や教養の習得に差が出て、富裕層の子は親を手本に社会評価の高い職業に就くべく努力するのに対し、そうでない親の子は、親と同じ低賃金で社会評価の低い職業に甘んじるからである。これが学歴の階層再生産である。ところが、明確な階級区分のない日本では、この階層再生産に気づかない。本来は出身階層や環境や遺伝という外因によって学力が規定されるのに、誰もが学校に行く環境を整え、形式的な客観性や平等に注意を払えば、あとは各自の才能や努力が結果を決め、それなら公平だという考えが定着した。このように階層再生産のメカニズムを隠すことが学校の目的であり、平等な社会を実現するための方策がかえって既存の階層構造を正当化し、永続させるのである。 学校については、仮にその目的について考えたことがなかったとしても、受験生はこれまで小学校、中学校、高校等に在学し、実際に経験してきた事柄である。受験生にとって、これまでの人生のほとんどを過ごしてきたであろう学校について、その目的を階層再生産という視点から考えてもらうことが、出題の狙いである。 ２　受験生に何を望むか まず、上述した課題文の論旨を正確に理解し、階層再生産のメカニズムが隠されていることについての筆者の主張について適切にまとめる力が求められる（読解力)。次に、これまで中学や高校で学んできた知識を総動員して、学校制度とメリトクラシーの関係について、論理的・説得的に自分の言葉で表現することが求められる（自説展開力)。